

# 1 主題構成表

主題名 「友情の尊さ」 (中学校第2学年)

資料名 「違うんだよ、健司」

## ■ 内容項目2-(3)

友情の尊さを理解し、心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。

## ■ 内容項目から見た生徒の実態 (意識)

- ・小学校からの人間関係の延長で、自分のことを理解してくれる仲間と一緒にいることが友情だと思っていることが多い。
- ・相手や周りに合わせた行動をすることが、仲のよい友達関係だと捉えている。

### (要因)

- ・所属する仲間から外れることに対する不安から、自分と考えが違っても共感し、安心感を得ようとしている。
- ・友達とはどういうものなのかがよく分からなかったり、心から信頼し合える友達のつくり方も知らなかったりするため、人間関係が希薄である。

## ■ 価値の分析

- ・真の友情とは、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がなければならない。それは、相手の人間的な成長を願いながら、互いに励まし合ったり、高め合ったりする関係である。しかし、中学生のこの時期は、集団の中で一人になることを極端に恐れるため、表面だけ合わせて同調している場合も多い。本当の友達とは何かを考えさせ、相手の成長を心から願って互いに励まし合い、忠告し合える仲間関係を育てることが大切である。
- ・中学生の時期は、交際範囲も広がり様々な人間関係の中で生活を送るようになる。その中で、生徒一人一人に友達を信頼することの素晴らしさや喜びを実感させることによって、友達のよさを素直に受け入れようとする態度を身に付けさせることが大切である。

## ■ 資料の分析

- ・生活が乱れがちになった耕平を心配して、転校してきた健司と主人公の3人で親戚の家に遊びに行こうと誘う。そこで出会った健司の祖母とその友達の会話や様子を見て、3人は、友達とは本来どうあるべきかについて考え、気付いていくという資料である。
- ・ショッピングセンターで、健司に「そんなのが友達と言えるのか。」と言われた僕の、適当に合わせておいた方が気楽でいいんだという気持ちに共感させる。
- ・「いや、ちょっとな。」と耕平に言われた僕が、耕平のことを気になりながらも、何もできないでいる気持ちに共感させる。
- ・互いの心のうちにある思いや悩みを語り合うことができたことを喜ぶ3人から、よりよい友達関係を築こうとすることで得られるすばらしさに触れ、本当の友情について気付かせることができる。

## ■ ねらい

相手の状況を気遣い、親身になって関わろうとすることが、信頼し合える友情を育むことに気づき、互いに認め合い励まし合おうとする心情を育てる。

## ■ 展開の構想

- ・ショッピングセンターで、健司に「そんなのが友達と言えるのか。」と言われた僕の、適当に合わせておいた方が気楽でいいんだという気持ちに共感させる。
- ・「いや、ちょっとな。」と耕平に言われた僕が、耕平のことを気になりながらも、何もできないでいる気持ちに共感させる。
- ・夏の大三角を見ながら話す3人から、よりよい関係を築こうとすることで得られる喜びに触れ、本当の友達とはどういうものなのかに気付かせる。
- ・よりよい関係を築こうとしている仲間を素直に認め、互いに高め合える関係を大切にしていこうとする意欲を高める。

## ■ 基本発問 (◎中心発問)

- ショッピングセンターで、健司に「そんなのが友達と言えるのか。」と言われた僕は、どんな気持ちだったのだろう。
- 「いや、ちょっとな。」と耕平に言われた僕は、どうしてそれ以上聞かなかったのだろう。
- ◎夏の大三角を3人で見ながら、僕はどんなことを思っているのだろう。
- これまでの自分の友達関係を振り返って、考えたことをノートに書きましょう。

## 2 学習指導過程

|          | 基本発問と予想される生徒の反応   | 指導・援助  |
|----------|---|--|
| 導入       | <p>◇資料への興味を高める。</p> <p>○自分にとって友達とは何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仲が良くていつも一緒に遊ぶ仲間。</li> <li>・遊んだり、話をしたりする楽しい仲間</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達とは何かについて交流することで、それぞれが友達に求めていることには違いがあることに気付き、価値への気付きを促す。</li> </ul>  |
| 展開<br>前段 | <p>◇資料提示（教師の読み聞かせ）をする。</p> <p>○感想を交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「そんなのが友達と言えるか。」ということと言える健司はすごいなあと思った。自分は言えない。</li> <li>・お互いのことが分かり合えるこういう仲間関係がつかれるといいなあと思った。</li> </ul> <p>○ショッピングセンターで、健司に「そんなのが友達と言えるか。」と言われた僕は、どんな気持ちだったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・別に普通じゃないか。</li> <li>・堅いことを言うなよ。</li> <li>・適当に合わせておいた方が気楽でいいんだよ。</li> </ul> <p>○「いや、ちょっとな。」と耕平に言われた僕は、どうしてそれ以上聞かなかったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いてはいけないことなのかなと思ったから。</li> <li>・あまり大したことではないのではないかと思ったから。</li> <li>・耕平のことが気になるけれど、耕平が言わないならば、聞かない方がいいかと思ったから。</li> </ul> <p>◎夏の大三角を3人で見ながら、僕はどんなことを思っているだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本当の友達っていいなあ。</li> <li>・健司のおかげで本当の友達というものがあった。</li> <li>・適当な関係でいいと思っていた僕は、耕平にとっても健司にとっても本当の友達ではなかった。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p><b>【深めの発問】</b><br/>本当の友達とはどういう友達のことを言うのだろう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・表面だけ合わせて付き合うのではなく、相手のことを考えて行動できるのが、本当の友達なのではないか。</li> <li>・相手に対して思うことが言える関係を築くことが、本当の友達をつくることになるのではないか。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・僕、耕平、健司の人物設定をはっきりさせておく。</li> <li>・どの場面に着目したかをつかみ、基本発問や中心発問での意図的指名に生かす。</li> <li>・耕平に対して適当に合わせている僕であることに気付かせる。</li> <li>・耕平のことが気になりながらも、何もできないでいる主人公の心の葛藤に共感させる。</li> <li>・表面だけ合わせて同調していた自分から、相手のことを真に考え行動できるようになった変容に着目させ、よりよい関係を築こうとする喜びに触れさせる。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p><b>●言語活動の充実</b><br/>健司たち三人の友達についての話合いを通して、多様な感じ方や考え方に接し、異なる視点からの価値について気付け、本当の友達についての感じ方や考え方を深める。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本当の友達とは何かを考えさせ、相手の成長を心から願って互いに励まし合い、忠告し合える信頼関係を築いていくことの大切さに気付かせる。</li> </ul> |
| 展開<br>後段 | <p>○これまでの自分の友達関係を振り返って、考えたことを道徳ノートに書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本当に高め合える友達関係を築くのはとても難しいことだ。自分も分かっているが、周りに同調してしまうことがよくあった。相手のことを考え行動していくことで、本当の友達関係を築いていきたい。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・よりよい関係を築こうとしている仲間を素直に認め、互いに高め合える関係を大切にしていこうとする意欲を取り上げ、価値付けていく。</li> </ul>  |
| 終末       | <p>◇教師の説話</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の成長を願い、共によりよくなろうとする関係を築くことが大切だと気付いた経験を語る。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・互いに尊重し、高め合おうとすることへの素晴らしさに触れることで、実践への意欲を喚起する。</li> </ul>  |



## 違うんだよ、健司

夏休み明け、一人の転校生がやってきた。日焼けした精悍せいかんな感じである。名前は米村健司。

健司は、僕と耕平の所属している野球部へ入ってきた。三人とも家が近いこともあって、登下校が一緒になり、共に過ごす時間が長くなっていった。

付き合ってみると、健司は何事も積極的で、はっきりとものを言う。ある日の掃除の時、耕平がほうきをバットにして振っていたら、さっそく、健司が、

「早くしようや。」

と、注意する。耕平が大きさに肩をすくめたので、僕もまねて肩をすくめた。健司は、鋭い目つきで、ちらつと僕の方を見た。

ある日、二人でショッピングセンターに出掛けた時のこと。自転車置き場がいっぱいだったが、耕平は、無理に押し込んだ。僕がどうしようかと迷っていると、

耕平が、

「その辺に突っ込んでおけばいいんだよ。」

と、僕をせかしてさっさと行ってしまった。慌てて自転車を突っ

込もうとすると、健司が言ってきた。

「おまえ、いつも耕平に合わせているけど、それでいいのか。」

「別に。それが普通じゃないか。」

「そうかなあ。そんなのが友達と言えるか。」

「おまえ、堅いんだよ。お互いに適当に合わせた付き合いが最高

なんだよ。」

そう言っ僕は、耕平の後を追った。

こんな調子で一年近かった二年生の七月のことだった。ある日、健司が話し掛けてきた。

「おい、この頃耕平、変じゃないか。」

「そうだなあ。部活も休むし、授業中もよく居眠りをしている

な。」

「何かあったのかな。」

と、健司は心配そうに言った。

「気になるんだったら、おまえが聞けばいいじゃないか。」

「聞いてみたよ。だけど、あいつ何にも言わないんだ。おまえ、幼なじみだろ。聞いてみてくれ

よ。」

僕も最近の耕平は少し変だと思っていたので、それとなく聞いてみた。

耕平は、一瞬、驚いたような顔をした。しかし、

「いや、ちょっとな。」

と言ったきりで、何も詳しいことは言おうとしない。もうそれ以上何も聞いてはいけなのだと、その時の僕は思っていた。

何も聞けないまま、夏休みに入ってしまった。そんな折、健司から思いがけない提案があった。



「おい。耕平を誘ってG町に行かないか。盆踊りがすごいんだぜ。」  
「分かった。いいよ。」

翌日、健司と二人で耕平の家に向かった。

「いや、僕は……、無理だ。二人だけで行ってくれ。」

「なあ、そう言わずに一緒に行こうよ。」

と、押し問答をしていると、耕平のお母さんが、

「耕平、せっかく誘ってくれているんだから、一緒に行ってきたら。」

「でも、お母さんが……。」

「いいの、いいの。行ってきなさい。」

G町に着いた三人は、健司のばあちゃんに大歓迎された。夕方、町に出ると大勢の人が踊っている。最初は見るだけだったが、僕たちも盆踊りの輪の中に入り、結構夢中になった。

踊り疲れて帰ってくると、家の中からぎやかな声がある。何ごとだろうかと思いつつ戸を開けると、二人の見知らぬおばあさんが台所に立っている。僕たちの驚いた様子を見たばあちゃんは、

「いやあ。お節介なばあさんたちなんだよ。」

と言う。

「何言ってるんだ。あんたの孫と友達に、鮎あゆを食べさせようと思って持ってきたんだ。これは親切というもんだよ。」

と、三人のばあちゃんたちはいかにも楽しそうに言い合っている。

その夜、僕たちは、三人のばあちゃんと晩ご飯を一緒に食べた。おばあさんの一人は、健司のばあちゃんと幼なじみで、もう一人のおばあさんは結婚してG町に来たのだそうだ。そのおばあさんが、

「今ではみんな家族みたいなもんじゃ。隠し事の一つもできん。」

と、言って嬉うれしそうに笑っている。

食事の後、僕たちは庭に出た。星がきれいだった。川のせせらぎも聞こえる。頬に当たる風が心地よい。僕たち三人は妙に無口になった。今日の三人のばあちゃんたちを思い浮かべていると、「そんなの友達と言えるか。」という健司の言葉が、僕の中によみがえってきた。ふと耕平を見ると、沈んだ様子でうつむいている。

「耕平、どうしたんだ。」

と、僕が聞くと、耕平がボソツとつぶやいた。

「ばあちゃんたち、元気でいいなあ。」

「えっ。」

「実は、おばあちゃんが……。」

と、ぼつりぼつりと話し始めた。

「この頃変なんだ。……もの忘れがひどくなって、何度も同じことを言うようになったと思っていたら、この頃は家を出て行って帰って来れなくなるんだ。昼でも夜でもお構いなしでね。だから何か物音がすると、どこかに行ったんじゃないかと一晩中気が気なくて……。」

「そうか、そうだったのか。」

「でも時々はいつもの普通のおばあちゃんなんだ。この間……僕の顔をよく見せておくれって……。憶えておきたいって……。言うんだよ。」

耕平の声は途切れた。黙って聞いていた健司が、

「耕平。ごめん。話しくいことだったのに、この間から言え、言えって。ごめん。俺はお節介だったんだ。」

「違うんだよ、健司。お節介なんかじゃないよ。なあ、そう思うだろう。」

と、耕平が僕の方を見た。

「そうだよ、お節介じゃないよ。健司が大事なことを教えてくれたと、僕は思っている。」

「俺、転校が多くて、早く友達になりたくて、ついお節介するんだよ。俺も友達ができて嬉しいよ。」

「耕平、僕に何かできることがあったら言ってくれよ。」

空を見上げると、真上に夏の大三角が明るく輝いていた。

内容項目 二―(三) 友情・信頼

出典 中学校道徳 読み物資料集

(平成二十四年三月 文部科学省)